

日本道徳教育学会神奈川支部 **研究大会2020**

研究テーマ： **道徳科の指導と評価の一体化を目指して**

～ユニバーサルデザインを意識した道徳科の授業～

2020年12月26日 まだまだコロナ過が続く中、神奈川支部では今年度から取り組んでいるオンライン形式で、研究大会を開催することができました。離れていても瞬時につながることができるというオンラインの利点を生かし、今回も60名近くの参加者が全国から集まり、熱い議論で盛り上がりました。



<模擬授業> **ユニバーサルデザインを意識した道徳授業の実践**
横浜市立榎が丘小学校校長 仲川 美世子 先生
横浜市立十日市場小学校主幹教諭 三井 信乃 先生

○仲川先生より ～横浜市の道徳実践について～

何のための道徳授業かという、自分にとってよりよく生きるためであろう。そのためには、生き方を見つめなおし、お互いが否定ではなく、受け入れあう事が大切である。なので、教室でも授業の中でも、安心して心の中を出せる雰囲気づくりをしなければならない。そこで、横浜市が道徳科で大切にしていることは、主に次のようなことである。導入では、教材を読む際の視点を与えることや、事前に生活経験を掘り起こし、内容項目を想起させておくことなどがある。また授業の中では、構造的な板書を心がけ、児童の発言がつながるように意識した進め方をしていく。できるだけ子どもたちの言葉を使ってまとめ、価値を深め、実践意欲を高めるようにしている。また終末では、子どもたちが自然にやってみようと思うまとめ方を意識している。



○三井先生より ～模擬授業による授業提案～

教材名「ありがとうの言葉」（東京書籍 4年）

まず、教材を理解するために授業前に「宿題として事前に教材にふれる」「テーマについての日記を書く」「朝の会で話をする」など、事前に内容項目について児童に意識化させた。掲示物などでも内容項目を意識できる環境づくりをした。そして、内容項目に関わる日常生活での疑問を問いかけ、謝ることについての意識化をさせた。そうして、読みの視点を意識させてから教材に入った。今回は、教科書ではなく、挿絵による読み聞かせをすることで、自分により近く物語を感じさせた。また、児童の疑問から課題をひろい、問いかけ直すことで、中心発問へとつなげるようにした。

また、自分の事を振り返る時間を長くとったり、役割演技を取り入れて主人公の気持ちに迫ったり、自分の気持ちに近いところに自分のネームカードをはったりと、意見を言うことや考えをまとめることが苦手な児童を支援するためにも様々な手立てをとった。また、「伝える」「ありがとう」などキーワードを強調する掲示をしたり、掲示物の色わけをしてわかりやすくしたり、板書を左上がりすることで気持ちの変化を視覚的にとらえられるようにしたりなど、様々な工夫を考えた。ただ、今回の授業は様々な授業形態の一つであり、子どもの実態に合わせて変えていくことが大切なので、他にも色々なやり方を模索していきたい。



その後の質疑応答で、「実際に子どもに対して授業をしてみたの感想を聞かれた時には、見通しをもって継続的に授業に取り組むことができていた。」「子どもの気持ちにそって取り組めた授業だった。」「子どもの思いをうけた一人ひとりの言葉がけが重要だと強く感じた。」と答えていました。参加者からは、礼儀とは「心」と「形（行動）」が一致した美しさである。言葉だけでもいけないが、心で思っても行動できない事もある、両方セットで考えていくことが大切でないか、という意見が出ました。それに対しては、授業の中で子どもに、「ただ『ありがとう』と言えればいいの言えればいいの？」と問い返した時に、「目を見る目」「心を込める」など、両方が大切だという意見が出たことなどが話されました。



<講演> ユニバーサルデザインを意識した道徳授業の実践

山口市立良城小学校校長 坂本 哲彦先生のご講演を聴いて感想

私たち神奈川支部も「全ての子どもが楽しく考え分かる工夫」「全員が参加し、考え議論する道徳」を目指し、子どもの実態に応じながら授業者の意図によって授業を変化させていくことを大切にしたいと思いました。坂本先生のご講演の感想を書かせていただきます。

坂本先生のお話のなかで、興味深かったことを紹介します。「学習が経時処理なのか同時処理なのか」一つずつやる良さ、同時にやる良さ、子どもの実態や活動内容によって変わってきます。また「物語的になっていない教材もある。」という教材の特質があることもわかりました。

「視覚化について」子どもの理解を深めるために視覚化し、思考を比べることで分かることが大切であると感じました。反面、ただの板書のための「視覚化」にならないように注意していきたいと考えさせられました。子どもたちの分かり方を穏やかにするために、「心情円盤」を活用し、事象を次の三つの側面から考えると分かりやすくなるという実践例も勉強になりました。①心情 ②行動 ③周りの人々との関わり 個々によって3つの捉え方の割合に違いが出てくるため③を考えることが難しい低学年の場合は①と②を中心に考えるとよいというお話もありました。

教師が分析した内容項目の価値のどこにフォーカスしていくか考え「登場人物になり切って考える（内側の発問）」そこから「内容項目の良さを考える（外側の発問）」をすることで子どもの意見を心情か行動かの分類していく手法も大変勉強になりました。



特別支援学級の子どもたちだけに行うものが、UDではなく、交流で来ている支援級の子どもや、通常級でも困り感がある子どももいます。全ての子どもたちが分かることが大切であり、全ての子どもに分かる道徳科授業づくりを実現する方法として考えているという部分は私たちも大変共感できる内容でした。分かり方は子どもそれぞれなので、学習内容を大きく教師のなかで想定しておくことが大切であり、それにたどり着くために「視覚化」「焦点化」「共有化」というポイントが有効だと感じました。

「共有化」においては、みんな同じみんな同じ答えでなくてもよい。一人ひとりが納得できる部分が違ってよいので「自分が納得できた」という解をもてることを神奈川支部でも大切にしていきたいと思いました。

参加者の方からも、道徳科のUDは全ての教科に当てはまる大きな理念だと改めて実感しました。「全員参加の分かる授業をすること」「誰もが参加できる発問」「道徳のねらいや捉え方」など大変勉強になった。など大きな反響がありました。

今年度は例年と異なり、オンラインでの研究大会を実現するまでに、様々な先生方の協力がありました。ありがとうございました。ぜひ来年は、対面で大会ができればと期待しています。今後も神奈川支部をよろしく願います。



(詳しい内容につきましては神奈川支部ホームページをご覧ください。)

<http://www.doutokukanagawa.com/>